

# 宝石サンゴの研究成果に関するプレスリリースについて

2018年7月2日 奥村知世

平成30年6月28日に開催された「宝石珊瑚国際フォーラム2018in高知」にて成果発表を行うにあたり、日本経済新聞社と高知新聞社に研究成果について取材を受けました。研究成果は下記の新聞記事にて報道されましたことを、ご報告いたします。なお両報道ともにインターネット版の記事も公開されております。

2018年6月26日(火曜)  
日本経済新聞

**高知・宝石サンゴ 7000年前に生息 高知大、枯木を調査**

高知大学海洋コア総合研究センター(高知県南国市の奥村知世特任助教は、高知県足摺沖で採集した宝石サンゴの枯木を調べ、最も古いもの

高知大学海洋コア総合研究センター(高知県南国市の奥村知世特任助教は、高知県足摺沖で採集した宝石サンゴの枯木を調べ、最も古いもの

調査を進め、宝石サンゴの資源管理などに生かす。宝石サンゴは宝飾品の材料となる。高知県の宝石サンゴ漁は枯木が多くを占める。生きた宝石サンゴは漁獲上限を設けるなどしている。

足摺沖の6漁場で採

集された枯木34試料を「放射性炭素(C14)年代測定法」という化学的分析技術を使って死亡した年代を測定。その結果、3試料は1950年以降だったが31試料はそれ以前で江戸時代が最も多かった。最古は紀元前6000年だった。

奥村特任助教は「枯木の多くはサンゴ漁が本格的に始まる明治時代初期までに死んだものであることがわかった」と説明する。今後さらに試料の数を調査区域を増やして枯木の形成過程や蓄積量を調べる。

【電子版】 <https://www.nikkei.com/article/DGXMZO32210180V20C18A6LA0000/>

2018年6月27日(水曜)  
高知新聞

**足摺沖 7600年前宝石サンゴ 高知大 好漁場環境裏付け**

奥村知世特任助教は「分析値として確認された中で最も古いのは、高知大が採集した足摺沖の古くから漁場に適した環境だったとみられる」としている。

本県などで採取される宝石サンゴは、生きた状態の「生木」と「枯れ木」に分けられ、枯れ木も高い市場価値がある。サンゴの生物学的な研究は十分に進んでおらず、網を海底に垂らして折れた個体が、枯れ木になっていくのでは」との説もある。

こうした中、奥村特任助教は、サンゴの生態や漁場形成の要因を推察するため、足摺沖で採取した枯れ木34本について、考古学で用いられる放射性炭素年代測定を実施した。

その結果、最も古かった紀元前5600年ごろを含めて、約9割の30本が、サンゴ漁が始まった1870年ごろより前の時代に枯れ木になっていた。これは、寿命や環境変動などの自然要因で死滅したと考えられる。

また、足摺沖の水深約100mの大深層は、古

いサンゴが泥などに埋まらな安定した漁場環境と推察できるという。

奥村特任助教は「漁場の形成過程を知るには、より多くの試料を測定し、海底環境も観察する必要がある。サンゴ漁の持続的発展には、生態系解明や資源量の適切な管理が欠かせない」としている。

**あす高知市で国際フォーラム**

高知県に関連産業が集積する宝石サンゴの保護育成や資源管理を考える「宝石珊瑚国際フォーラム」を企画した。

奥村特任助教を含む国内外の研究者らが研究成果や資源管理の取り組みを発表。パネル討議で情報交換する。近畿圏治行委員長は「保護育成の取り組みを国際的にもアピールしたい」としている。

無料。問い合わせは同協議会(0888・826・0000)へ。(井上智仁)

縄文時代だった紀元前5600年ごろに死んだ宝石サンゴの枯れ木 (奥村知世特任助教提供)

【電子版】 <https://www.kochinews.co.jp/article/194639/>